

『ワインの歴史』

山本博 著 河出書房新社 2,940円(税込)

ワインは文化である。
古代から現代までのワイン発展の歴史。
ワインのことをもっと深く知りたい方の基本書

会員 西口 徹 (22期)



酒を飲む人の中には酒の種類にこだわらない人もいるが、そうでない人もいます。なかでも「私はワインが好きです」と言い切る人は少し違ってきます。ワイン以外の酒も飲むが、ことワインのこととなると一言を持っていく人が多い。ワインに関する本を買い込み勉強し、ワインを極めようとする。それは、産地、畑(土壌)、生産者の造り方、ブドウの品種、ヴィンテージ(生産年)等々によってワインは全く違う物になるからで、ある程度ワインの知識があった方が楽しく飲めるからである。同じブドウ品種で作ったワインでも、生産地(国も含め)、生産者、畑によっても味は異なるし、同じ生産者の同じ年の同じワインでも保存状態などによってはボトル毎に違ったものになることもある。

ワインはブドウを原料にした醸造酒であるが、それぞれのワインを生み出す自然の恵みばかりか、生産に携わる人の愛情にも左右されるからで、更に言えばワインの育ってきた歴史、文化にも強く影響されているからかもしれない。

私もワインが好きで、ワインに関する本を読みながら20年位飲んでいるが、年のせいかわか覚、嗅覚が鈍化し、最近ますますわからなくなってきたというのが正直な感想である。

今日紹介する「ワインの歴史」の著者は、本会の会員であると同時にワイン業界では知らない人がいないくらい高名なワインの研究家である。著者はカリフォルニアの白ワインに「シャブリ」を表示することを止めさせ、そのためフランスのシャブリの生産者から「シャブリの恩人」として尊敬されている。また、ボル

ドーの多くのシャトーやブルゴーニュの名だたるドメーヌのオーナー(ロマネコンティ社は勿論)とも親交がある。

本書は、ワイン文化の発祥の地であるメソポタミアの時代から現代に至るまでの著者の極めて鋭く、かつ豊富な歴史に対する知識と洞察に依拠して書かれたワインの歴史の教科書的著作である。その内容は多岐にわたり、全てをここに紹介することは不可能である。

メソポタミア、エジプト、ギリシャ、ローマに始まり現代に至るまでワインがどのようにして生れ、それが当時の権力者、あるいは大衆によってどのように飲まれたか。ワインが宗教(ユダヤ教、キリスト教)とどのようにかかわりを持ったか。フランスの化学者パスツールによるワインの発酵に対する科学的解明をもたらしたものは何か。産業革命とワイン。ボルドーワインとブルゴーニュワインが育った歴史と文化の違い、等々興味深い中味である。

著者の多くのワインに関する著作のなかでも、本書は永年のワインとのかかわりの中で、ワイン全般について研究した成果の集大成ではなからうか。従って、単なる「ワイン飲み」ではなく、ワインをひとつの文化の産物として、もう少し勉強して楽しく飲んでみたいという人にとっては格好の書である。また本書の中に各章ごとに掲載されている膨大な参考書籍、文献は、より深くワインを研究したいと思う人にとっても貴重な資料であることは間違いない。ワイン研究の基本書となるものと思う。ワインをおいしく、楽しく飲むために是非一読されたい。